

## 熊のフオークロア

篠田知和基

民間伝承における熊の重要性はけっして小さくはない。いくつかの(各国にまたがる)説話伝承体系において、馬、猿、蛇、狼など、特定の動物の占めている位置、機能を調べることは、それぞれの文化のなりたちを調べる上で有用である。そこには、運搬、耕作等直接、人間の技術にかかわってきた動物もいれば、錬金術における狼のように、ある種の技術を象徴する動物、雷や水など自然の要素をあらわす神話的動物、何らかの技術を管理していた部族のトータム獣で、その技術と担い手を介して結びついた動物などがある。

養蚕起源神話における馬の役割は、偶然の結びつきではないだろう。伝承によっては犬の神話とも接続する。が、たとえば猫とか豚であることはけっしてない。熊は羊毛の紡績に関係すると言ふ。(ゲニユベ『カーニヴァル』)。

「鶴女房」の伝承はふしぎな織物に結びつくが、それが絹か、麻か、綿か、この伝承だけでは断定できない。

ヨーロッパの「鴨女房」は鍛冶族の伝承であるとされている。その伝承がしかし、日本の「鶴女房」と同じ源泉から出ているという

保証はない。

技術の伝播には特定の説話が随伴するとしても、その説話の装いは移植先の風土にあわせて変化する。

一方、同一風土の中では同一動物種の機能の解釈が文化変容をこうむりやすい。

ここでは熊のフオークロアを考える。北方民族における熊の重要性はよく知られている。日本でも熊の分布は薄くはなく、地名、人名では「熊」のついたものが馬や犬より多い。しかし、たとえば「今昔物語」には熊は登場せず、熊の信仰も知られていない。

ヨーロッパでも熊の痕跡は濃厚であるわりに、現存の文化には熊の存在は稀薄である。「熊」は東西の消え去った古層文化の象徴なのだろうか？

※

「甲賀三郎」譚の源流は「熊のジョン」であるとされる。<sup>(1)</sup>  
メリメの『熊男ロキス』は民間伝承の文学的変容である。<sup>(2)</sup>

「人狼」が「熊男」であるばあいが少なくないことは「人狼」考

で略述した。<sup>(3)</sup>

ラングドックルション地方のカーニヴァルの行事に登場する「熊」は、冬の人格化で、この時期に冬ごもりから出る熊に春の復活を見るフォークロアは各地に広くみられる。<sup>(4)</sup>

狼の文化圏と熊の文化圏があつたとすると、スイスのベルンから、<sup>(5)</sup>  
(ドイツのベルリンも含め)ブルターニュ、アイルランドに達するケルト文化圏は熊の文化の通過の痕跡を残している。

アーサー王の名が「熊の王」の意であることも知られている。<sup>(6)</sup>

ベルンには熊とともにあらわされた女神アルティオのプロンズ像がある。<sup>(7)</sup>

しかし、それは馬の女神エポナのばあいと同じく、物語を残さずに消えた神話であつて、わずかな彫刻の断片から神話、あるいは崇拜の相を想像するだけでしかない。

巨人伝説(ガルガンチュア)や龍女伝説(メリュジーヌ)に比して人狼伝説がすでに固定した神話のない伝承だと言つたが、熊男となると一層、文字による証言が乏しくなる。

エポナのばあいには、まだユベール、ランブレヒト、マニヤン、ギリクールら神話学者あるいは考古学者の論証があるが、アルティオについては、例のベルンの彫刻以外の手がかりもない。

熊の女神や熊への変身が、神話として、あるいは儀礼として存在していたことがたしかでありながら、それがどのような物語であつたかとなると、にわかにあいまいになってくる。そこにある種の光

を与えてくれるのは、地理的・時間的へだたりを置いたテキストの重ねあわせである。

太陽の死と復活をめぐる神話などは世界中に分布していて、不完全な伝承しかないところでは、他の地区の伝承を参照しながら、補つたり、想像したりすることができる。

アルティオ神話も、他の文化圏で、しかし、ヨーロッパ文明とならかの共通項を持つている文化圏で、似た話型を重ね合わせてみること、ある程度は復元することができるかもしれない。

ひとつはもちろん朝鮮の「檀君」神話である。

もうひとつは、現在、フランスのサヴォワ地方で豊富に採集される「熊と女」の話である。

考古学者が壺の破片などから復元しようとする失われた過去の物語を、比較神話学、比較説話学は、口承・書承の物語を通して、(ばあいによると近代の文学作品の参照をもあえて恐れずに)浮きあがらせようとする。

※

石田英一郎の『河童駒引考』は牛—馬—猿の連鎖的交替のあとを民間伝承にさぐって、ユーフラテスのほとりの水神信仰からわが国の庚申信仰まで一貫性があること、そして、猿と馬に水神の性格があることを論証した論文である。

柳田国男の「炭焼小五郎が事」は、日本各地に大隅半島から下北半島まで鴨に小判を投げる炭焼の話が流布していることをあきらか

にした上で、昔の漂泊の金工民の文化と、その生態をあとづけた。いづれもその後、数々の研究者によって、補完、修正の努力がされているが、それらの研究の端緒をなしたことだけでも、而論文の功績は多とすべきである。

世界各地に同じ話をさぐるということは、第一に文化のつながりを立証し、それによって他の文化要素、あるいは人的、物的移動があったことを予想させ、そのつぎに、その文化の本原的な姿を復元させるとともに、文化移動の形態もあきらかにさせてくれる。

鴨に小判の話が『河童駒引』伝承のたどったルート沿いに発見されるなら、金工民とその文化の移動が水神信仰を持った農耕民とその文化の移動に随伴していた可能性が高い。<sup>8)</sup>

そのばあいしかし、鴨は白鳥にもなろうし、あるいは鳥にもなるかもしれない。馬と猿が入れ替わるような劇的な象徴転換があるなら、たとえば鶴が呑みこもうとする田んぼのどじょうに同じ性格が移行するというようなことだってありうるかもしれない。

ただし、構造の類同性によっては伝播は立証されない。英雄神が異常出生をし、手足容貌に欠損や変形を呈し、川や山に捨てられ、動物的要素(羊飼いや動物の牝)によって養育されて、やがて、長じて冒険旅行ないし父母をさがす旅に出て、知らずに父を殺し、母と交わる話は、英雄神の出生、生い立ち、婚姻(近親婚)、そして先王殺戮と即位のプロセスにおける定型を、たとえば親族の基本構造における交叉婚のシステムのように、全人類的にたどるもので、伝

播ではない。<sup>9)</sup> 一夫一婦制と親子同居の家族制度、長期の養育システムという、半ば種の特異性に基いた社会構成がかなりの頻度を持つて平行的に生みだす「基本神話」なのだ。

また、太陽神が洞穴にこもる神話も、太陽の運行をめぐる自然神話で、月の斑についての起源説話や、卵、洪水、日光感精などによる創世説話と同じく、どこでも自然に成立しやすい話で、それだけでは伝播の必然性はない。

それに対して、何らかの文化、信仰、技術に随伴する二次的説話において、伝播の媒体とともに説話の類同性が確認されれば、説話と、技術ないし文化、そして、人間の同時移動の可能性が高くなる。モチーフの複合性があればその仮説の整合性はさらに高まる。

「炭焼小五郎」譚の文脈で言えば、鴨などの水鳥をトープテムとする部族が鉄の採取、精煉、鍛造のいずれかの技術を獲得して、部族の秘密として、物語化してシャーマンないし語り部が保管しつつ、その技術の力で近隣諸部族を征服しながら移動、そのあとに「鴨女房始祖譚」を残していったという畑井弘らによって想像されているパターンは、<sup>10)</sup>物語と技術と民族の移動が連続的に立証されれば仮説ではなく事実となるだろう。

ただしそこでは大なり小なり部族の秘密、あるいは成人結社の秘密がかかわってくるとすれば、未入門や部族外の者には容易に秘密がわからないような象徴的表現が物語においてもとられるのである。うし、部族間、さらには異った風土において伝播をくり返すうちに

は、物語の構成要素の交替、地方的偏差が生じるであろう。また、異った価値観の導入による「人物」の役割の交換(殺すものと殺されるものが入れかわることなどはよく起る。自然の猛威をあらわす荒ぶる神が悪魔になって、はじめに撃退されてしまうというようにすることもよくある)もおこりえよう。

ヨーロッパの「呪われた獵師」の伝承がカナダに伝わって「空飛ぶカヌー」の滑稽譚になることは知られている。

日本の「猿神退治」とヨーロッパの「龍退治」が、同一構造を持つだけではなく同一源泉を持つ物語であることも知られている。<sup>1)</sup>

異文化においては当然、衣服、風俗、動物相の入れ替えがおこなわれる。

ところが、装いがちがっていきかるべき異文化間にまったく同じ装束の物語が発見されることがある。導入後、文化変容をおこなうだけの時間がないばあい、あるいは同じことだが、異文化理解が進んでいて、外来語受容のように外来概念をそのまま受け入れるばあいがそのひとつで、日本における「手無し娘」がマリアと観音の入れ替え程度で受容されているのがその例だが、もうひとつは、それ以前において「基本構造」の一致によるか、あるいは偶然の相似がある。「似ている」から「同じ」だとは言えないので、比較においては神話の象徴のシステムに通じている必要がある。

『漢書』顔師古の注に、禹は熊となつて治水事業を行った。それを妻が見て、恥じて石になつたとある。

禹の父親の鯀は死んで黄熊になつた。『左伝』の昭公七年に「黄、堯鯀を羽山に殛せしに、その神化して黄熊と為り、以て羽淵に入り」とある。

この禹の子の啓から夏王朝がはじまる。すなわち、夏王朝は熊を始祖とする王朝である。これを中国のはじめとする。

神武東征伝説に神熊の出現が語られる。神武はじめ全軍が昏睡状態に陥いる(あるいは神がかりのエクスタシーとも見られる)。神武の夢に神のお告げがあり、神剣の授与が告げられる。大林太良はここで、神武以下全軍が「その妖気によって倒れたのであるから、(熊は)マイナスの価値をもつ」(『神話の系譜』一八八六、一二八頁)と言うが、これは逆であろう。畑井弘は鍛冶神の持つ金属呪力と見る(『天皇と鍛冶王の伝承』一九八二、二七六頁)。

神剣を得る話はもちろん八俣大蛇であり、山の妖気にあたつて王者が喪神する話は伊吹山の日本武尊と白猪ないし異伝による蛇である。異界へ踏み入つたものが白猪、白鹿などの導きで神域に達し、超越的な存在との出会いをエクスタシーの状態で経験するという物語は、世界神話の基本構造である。そこで超越者は山や湖の「主」としての異形——おおく龍蛇身、または山親爺としての大熊——であられ、英雄に対して鉄身あるいは神剣を与える。そのとき弱いものは神の顕現を受けとめられず昏倒し、選ばれたもののみが神を目撃する。

朝鮮の『三国遺事』に、熊が女となり、天神と交わつて国祖檀君

王儉を生む話がある。ほかに卵生説話、日光感精説話、また箱舟漂流型等があり、三品彰英によると朝鮮は卵生型神話の境域となる。

檀君説話では、熊と虎がともに人間となることを願って、熊だけが女になった。しかし朝鮮半島では虎のフォークロアのほうが熊のそれより濃厚で、この話だけで朝鮮を熊の文化圏と言ってしまつていいものかどうか疑問である。

ジョルジアの豊饒儀礼に熊祭りがある。まず村で一番大柄で太った女が「熊」と名づけられ、男装をしてあらわれる。人々が、殿さまはどうやる、農民はどうする?と聞くたびに、それぞれのジェスチュアをする。最後に「早く嫁さんをもええ!」と言うと、女たちに襲いかかって、中の一人と性交のジェスチュアをする。

また種播きのときにも熊の皮をかぶって「熊」と呼ばれる男が若い娘をさらって小屋に連れこむ。(キヤラキジェ『古代ジョルジアの宗教システム』一九六八)これと、熊を殺すときに魂祭りをおこなうアイヌやシベリアの風俗とは同じ熊祭りでも一致しない。これは狩猟民族の熊祭りではなく、農耕民族の豊饒儀礼である。穴ごもりや春の山間の播種期の農耕儀礼に熊を登場させる。言うまでもなく、水の必要度の高いところでは龍蛇神信仰が優先する。

北欧の熊戦士ベルセルクルは、ウルフェドナルとも言い、「狼戦士」と区別されない。<sup>(12)</sup>野獣の皮をかぶって戦場で荒れ狂う彼ら、そして、後代になると、物盗り略奪をもっぱらにする野武士としての

「ベルセルクル」には必ずしも、「熊」の特有性はない。

しかし、ある戦士が館の広間で寝ているあいだに巨大な熊が戦場で敵をけちらして、その戦士を仲間が揺り起こして戦場へ連れていったら熊は消え去ってしまったという話においては、これは「狼」ではなく「熊」である。

アテネ近郊ブラウロニア(現ヴラオナ)でかつてアルテミスに捧げられた熊祭りがあつた。<sup>(13)</sup>アルテミスはその名前からして熊に関わりがある。祭りは「アルテミス講」によって組織されていたらしく、五歳から十歳の少女たちが黄色い衣を着て、熊のしぐさをまねる。彼女たちは、「熊娘(アルクトイ)」と呼ばれる。祭りは五年ごとに行われる。プラヌーフは、神婚儀式と人身御供があり、のちに熊の犠牲にすりかわつたのではないかと想像する。(三二八頁)

その根拠はイピゲーニアの神話で、ブラウロニアで犠牲にされようとしたときに熊にすりかえられたと言う(プラヌーフ同)。

しかし、これは多少話が飛ぶ。イピゲーニアがアルテミスに関わりがあるのはたしかだが、アルテミスに捧げられる獣は山羊である。一方、イピゲーニアのかわりに置かれた獣はエウリピデスでは鹿で、これが一番よく知られている。異伝では牛というものがあり、パノデモスによると熊になっている。つまり、熊とされるばあいもあるが、それ以外のばあいもあつて、熊とは限らない。またイピゲーニアが犠牲になった場所としてブラウロニアをあげているが、エウリピデスその他ではアウリスである。

アルテミスは鹿をかわりに置いて、イピゲネシアをさらい、タウリスに導いて、そこで自分に仕える祭女とさせる。これが外国人を犠牲にする恐ろしい祭女で、彼女の兄弟オレステスがやってきたときに、彼を救うためにともに逃げ、ブラウロンに着く。(エウリピデス)。イピゲネシアの犠牲については、アガメムノンが鹿を射とめて、アルテミスより上手であると自慢したために神の怒りに触れたとピエール・ブリュレは言っている。(『アテネの娘、古典時代におけるアテネの娘たちの宗教』一九八七、七九頁)。

エウリピデスは、アウリスに集結したギリシャ軍がトロイアに向けて出航できないまま、占師にあたつたところ、イピゲネシアを犠牲にせよと出たと言う。

アリストパネースの『女の平和』(リュシストラス)で、アテネの良家の子女が町のためにすべきつとめを列挙して、女のコロスが歌う。

「それからつぎにブラウローニアのお祭に、黄色い衣の熊乙女、ついで見事な乙女になって、」云々とあり、高津春繁は、その訳文に注記して、「アッティカのブラウロンには、イピゲネシアの神話で有名な、人身御供を求めるタウロイのアルテミス女神の神域があり、アッティカの乙女は、ブラウローニア祭において、アルテミスの神獣たる熊をかたどって、黄色い衣裳を着て、熊の真似をしながらはならなかった」(『ギリシャ悲劇全集』II、一九六一、人文書院、七七頁)と解釈する。その文脈なら、さきのブラウヌーフの言も

理解できなくはない。

しかしそれでもなお、人間の犠牲を求めるタウリスのアルテミスと、熊娘に奉仕させるブラウロンのアルテミス、そして山羊や鹿の燔祭を求める他のアルテミスが混同されている感がある。熊娘はいたが、それが、まず人間の、ついで熊の犠牲のかわりであるかどうかは疑問だ。

この祭の起源としては、あるとき狩人がアルテミスの神獣である熊をあやまって(ここでも「すりかえ」の観念がある)殺したことに怒って、アルテミスが災を送った。そこで憤いとして処女を一人いけにえにすることにした。しかし、この「いけにえ」は最後になつて山羊と「すりかえ」られる。女神は、アテネイの娘がすべて、結婚前に「熊」になるならと言って、その「すりかえ」を認めたという話がある。

カリストの神話は多少これに関係がある。ニンフだったと言うが、それよりアルテミス信女団の一人と言つたほうがいいのかもれない。リュカオンの娘で、アルカディアの王アルカスを生んだとも言つる。アルカスの父はゼウスで、アルテミスの姿で交わつたと言うから、アルテミス信女団は男嫌いのレスピアン集団であったとも考えられる。アルテミスはカリストの妊娠を知って背誓を怒って、熊に変える。ゼウスは彼女を天にあげて大熊座にする。<sup>14)</sup>

ポリフォンテという娘がいた。アプロディーテーの仕事、すなわち家庭内の女の仕事を嫌がって、山に登ってアルテミスの仲間にな

なった。アプロディーテーは仕返しとして、熊を好きになるようにしむけた。ポリフォオンテはその結果、熊に夢中になり、神的な興奮にとらえられて熊と交わった。(アントニウス・リベラリス『変身』  
二) アルテミスがやはりその処女喪失を怒り、山から追い出す。生まれた子供は乱暴な野生人の双児で、最後は親子ともども神の罰で鳥になる。

スイスのムリで出土したブロンズ像の女神アルティオはアルテミスに相当する熊の神であると言われる。

スイスには洞穴熊の骨が洞窟から発見されており、先史時代の熊信仰の存在が推定されている。この群像はそれよりずっと後代のものになるが、女神は果物を入れた籠を持っていて、山の幸をあらわすと見られる。ケルトでは馬の女神エポナが水に関係するが、一般に「大母神」という漠然とした女神観が強く、機能分化が進んでいなかったようだ。

ピレネーのふもとの町アルル<sup>(15)</sup>シユル<sup>(15)</sup>テックでは毎年、春のはじめに(カーニヴァル)熊祭りが催される。主役は熊と若い娘ロゼッタだ。どちらも村の若者が扮装する。まず、それぞれに木の仮面などをつけた村人たちが広場で踊っている。そこへ熊があらわれてロゼッタに襲いかかる。しかし「狩人」たちが「熊」をつかまえ網をつけて引き回す。やがて熊の洞穴をかたどった小屋がけのある広場に着く。するとやにわに熊がロゼッタをさらって小屋の中に逃げこむ。

しばらくして熊が出てくると、今度は容赦なく狩人たちに射ち殺される。しかし祭りはまだ終わらない。第三幕、熊の死骸が椅子に坐らされ、ロゼッタが前かけをはずして首にかけると、死んだはずの熊がぱちりと目を開ける。そこを村人がよってたかつて石鹼を塗りたくって鎌で毛を剃ってしまう。そして「美男」になった熊がもう一度ロゼッタに接吻しようとする、あらためて狩人に射ち殺される。あとは無礼講になる。(プラヌーフ五八―九頁他)。

アルプスのドフィンネ地方では、娘(あるいは若妻)をさらってゆく熊の話がいくつか伝承されている。実話では一七九四年に、モン<sup>(16)</sup>スニ山の山岳パトロールが、娘をさらってゆく熊をみつめて射ち殺した。(ジョイステン『サヴォワ民譚集』)。

それより前に一六〇五年に『熊にさらわれて、犯され、三年間洞穴に閉じこめられていた娘の恐るべき話』という小冊子が出ている。娘は十六ないし十七歳、アントワネットと言うナヴの村の娘だ。一六〇二年のある日曜の朝、ふいに熊があらわれて娘をさらい洞穴に連れていった。熊は食べものを持ってきて、娘を大切に扱った。やがて子供が生まれたが、熊が抱きしめてかわいがっているうちに窒息死してしまった。あるとき、木こりたちの声が聞こえたので、熊の留守を幸い、助けを求めた。助けられたときには髪は伸び放題で泥だらけで、人間らしいところはなかった。熊はあとで村まで追いかけて来たが村人に殺された。娘は悲しみに沈んで慰めようもなかった。

一八一四年、ピレネーの山中で裸の狂女が発見された。前年から山の上にいるのが目撃されていたのだが、冬が来て、凍え死んだものと思われていたのが、春とともに再び姿をあらわして人々を驚かせたのだ。山狩りが組織されて、女を保護し、冬のあいだどうしていたのかと尋ねると、熊の洞穴にいたと言う。熊は怖くなかったかと尋ねると、「熊は友だち、身体をあたためてくれた」と答えた。彼女は一度脱出して、山へ戻ったがまた捕えられて、牢で死んだ。

のちに山の洞穴で彼女がつけていた手記が見つかったとして、『ビュドリー夫人の悲惨な最期』という本になって一八一七年に発表された。フランス革命のあいだスペインへ亡命していた貴族の夫婦がフランスへ戻る途中、ピレネーの山中で追いはぎにあい、貴族は殺され、女は凌辱され、そのまま山賊の首領の女になる。やがて子供が生まれ、それをきっかけに、山賊が泥棒商売から足を洗って堅気になって町へ行って住み、子供にもちゃんとした教育をささげようとしたときに、ふとした事故で父親が死に、子供もまもなく死ぬ、女は狂って山の中へ駆けこみ、熊の洞穴へ入って熊の一家と生活をとにする。

この「実話」をもとに、その後、少なくとも五編の小説が書かれる。

女は熊と夫婦になっていたとはされていないが、彼女が町を逃げだして山へ戻ったときには熊の一家が大喜びで歓迎したと言い、家族の一員であったと書かれている。

昔話では「ナネットと熊」他がある。三人娘がはしばみの実を採りに行く。すると熊が出てきて、「一番きれいな子を連れていこう」といってナネットをさらってゆく。母親が出かけていって、まず熊にザルで水を汲んでこさせる。しかし熊は泥でザルの目止めをして水を汲む。つぎに黒い羊の毛を渡して、川で洗って白くしてと言う。熊が一生懸命に洗っているあいだに逃げ帰る。熊は娘が逃げたのを知って、大声で泣く。(ジョイステン『ドフイネ昔話集』)。

三人娘の末っ子が熊の嫁になり、しかし、跪計をもって熊をだまして逃げてくるという話は「猿髯」や「蛇髯」を思わせられる。母親が熊に仕事をさせるのは「難題髯」のモチーフだが、水を汲んだり川で羊毛を洗ったりするところは、(黒い羊毛の話は他でもよくある話だが)この話が水の信仰とかかわっている可能性を示している。つまり、蛇髯の水乞い譚や猿髯の谷川での髯殺しとつながっている。この地方では「熊のジョン」も娘の誘拐から話が始まる。

トルコのアナトリア地方でも熊が女をさらう話が実話として語られている。一九五二年に十四歳のハチスという少女が泉へ水を汲みに行ったところを熊にさらわれて、洞穴に何日かとじこめられた。

その間、熊は、食べものを持ってきてくれ、しきりにハチスの足の裏をなめたと言う。一九五三年二月八日から二十七日まで新聞にその関連のレポート記事が載っているとトルコ学者のボラタフが述べている。(「アナトリアの熊の話」F・F・C・一五二、一九五五)。ボラタフにはつぎの話もある。



あるとき三人の女が森で薪を伐っていた。一人が遅れて、立ちあがろうとすると薪が持ちあがらない。ふり返ってみると熊がその上に腰を下ろしていた。熊が、俺の嫁さんにならないかと言う。女は承知して、洞穴に行く。やがて上半身熊の子供が生まれる。彼女が必要なものすべて熊が持ってきてくれた。ある日、川で洗濯をしたいと言うと、熊が彼女に紐を結わえて出してくれた。そこで川岸の木に紐を結わえて逃げた。熊は怒って子供を殺して女を追いかけた。しかし、女の亭主が熊を止めた。

これも半ば実話として語られている。実話であるなら熊にさらわれた女が逃げた話か、「熊」と呼ばれる人間、森の住人にさらわれて子供ができた話かどちらかであろう。

神話的な話であるなら、やはり、川で洗濯というところが気になる。紐をつけて云々は、赤頭巾や山姥譚で東西でよく出てくるモチーフだ。

熊使いがお城にやってきて熊を見せたところお姫さまが熊に夢中になって、床をともにし、やがて一緒に駆落ちをした。そして、とある国に住んで女は毎日、熊のために肉を買いに行った。肉屋がそれをあやしんで後をつけ、女が熊と寝ているところを見て、熊を殺し、女を自分の家へ連れてくる(ボラタフはここで、女は男装をして小僧になっていたのであろうと言う)。肉屋はかくて二人の女を家に囲ってかわるがわる交わったようだが、そのうちもとの女房の要求が激しくなって、肉屋は小僧ともども逃げだす。熊の「色好みの

虫」がお姫さまと肉屋を経て肉屋の女房に伝染したのだと言う。

この話はフォークロアよりはノヴェラ(奇譚)に属する。熊が女をさらっていった、洞穴に閉じこめる話ならどこにでもある(中国、アルプス、他<sup>1)</sup>)。そこで生まれた子供が毛むくじやらの怪力童子で、怪物退治で名をあげる話は「熊のジョン」だ。

「甲賀三郎」譚を「熊のジョン」に接続させるのは、三郎の地下の国から妻を救出し、ついで、兄弟に裏切られて、地下を遍歴してくる話が、「熊のジョン」を包摂する三〇一番型話型「王女救出」に相当するからであり、獣類との異種婚や、山中での怪力童子の異常出生の部分とは関係がない。

日本では女が猿、鬼、夜盗にさらわれて山の岩屋に閉じこめられる話は少なくない。ちなみに西欧の熊が東洋で猿になることは南方やグベルナチスによって主張されている。

「猿と熊はインドでは密接に結びつけられている」(グベルナチス『動物神話』II、九六頁)。

「動物自身(猿)は目にすることがないと消えてゆくが、神話自体は強固に残存するので、しだいに、南ではロバ、北では熊にすりかえられてゆく」(九七頁)。

ただし、ロバと猿は、「好色」「愚鈍」の二要素で結びつき、ハヌーマンの太陽神的性格は熊のほうにしか移行しない。

福島の昔話で猿が女をさらう話がある。「初泊の行く途中で、まけ猿にいきあってつか、妻を連れて行かれ、御亭は木き縄でつながれ

たと。

「初泊り」は仙台の方の方言で「里帰り」をさす(柳田『婚姻習俗語彙』) いずれにしても、新婚勿々の新妻が猿にさらわれる。

亭主は通りかかった按摩に縄をほどいてもらって、鉄砲を持ち、犬を連れて「まけ猿の跡を追って、だん／＼山奥さ行っただと」。

すると小さな家があって、女房がいて、猿たちはいま狩りに出ていると言う。そこで女房が亭主を二階に隠すのは、人喰い鬼の女房が旅の少年を物かげに隠す話と同じだが、このあたりはどこでも同じになる話だろう。犬のほうは空っぽの風呂桶に入れる。風呂桶は「食わず女房」の山姥譚で出るが、これも、いまはおいておこう。やがて猿たちが帰ってくるが、親分猿が病気だと言って騒いでいるというのも本筋とは関係がない。そこへ犬を離して鉄砲を打って退治する。(『河童火やろう』石川純一郎編、S四七)

讃岐の『候えばくばく』という昔話集に、「鬼の岩屋」という話ののっている。「昔にのう大けな岩屋の中に鬼が居って、手下に大勢の山賊を使うとつたそうじゃ」と言うから、異類と言うよりただの山賊のようでもあるが、この鬼が「手下におなごのけっこいのを一人連れて来い」と言う。手下が呉服屋の嫁に目をとめてさらってくる。亭主が奪われた嫁をさがしに出かけて、例の手下をつかまえて、鬼の岩屋へ案内させる。鬼が酔って寝たところをたたき殺す。水乞い譚などから派生する鬼嫁入でも、爺が娘に会いに行つて一緒に逃げてくる話がある。『すねこたんばこ』ののっている稗貫の話では、「月

日がたつのは早いもんで、鬼と娘の中さ子供も出来、その子供も成人した」。娘が父親に、一度会いに来てくれと言うので、爺が鬼の家に泊まりに行く。しかし、寝ているあいだに鬼が爺を食おうとするので、親子孫で逃げだす。鬼の五百里車で逃げて、追いつかれそうになると娘が尻まくりして逃げる。子供が自分の首をさらして鬼除けにしてくれという話までついている。鬼の子で人間ではないのだからというわけで、これは熊の子の話でもときおり出てくる。(『鬼の子小綱』)

女の尻まくりは洋の東西を問わず、魔除けで使われるモチーフで、毛だらけのむさくるしいものを見せるので鬼(悪魔)が辟易すると語り手は言うが、もちろん、出産、豊穰をめぐる俗信の変化したもので、女の力をあらわしたものだ。が同時に、鍛冶伝承における女のタブーも想起される。クフーリンは迎えに出た裸の女たちを正視できなかった。

「熊罽」という話もあるが(『鬼の子小綱』)、猿と同じに畑仕事の手伝いからはじまって、娘の機軸で怪物罽を厄介払いする。熊の必然性はない。日本の昔話では熊の存在は稀薄でヨーロッパにおける「女の略奪者」のイメージでは猿になり、北欧の「熊戦士」に類する伝承ではなく、シベリアのシャーマンの憑依動物としての熊も(アイヌを別とすれば)存在しない。その中でもっとも熊の存在の濃厚な伝承は足柄山の金太郎であろう。

金太郎の一般的なフォークロア中のイメージは、足柄山に生い

育った怪童で、熊と相撲をとって遊び、長じて頼光の四天王となるというものだろう。育ての親は山姥だがフォークロアではこれを母とは必ずしも明示せず、父親はまして不明である。

「熊のジョン」も父親の熊と相撲をしながら大きくなる。山姥も熊にさらわれて熊とともに暮らすうちにいつしか山の女になってきたものとも考えられる。

文献では『前太平記』に、頼光が上洛途次、足柄山で赤色の雲気を見て綱に命じて様子をさぐらせて金太郎を発見する。山姥は「是わが子なり、(…)一日この巔に出でて寝ねたりしに、夢中に赤龍来て妾に通ず。その時雷鳴夥くして驚き覚めぬ。果たしてこの子を孕めり」と言う。

大島建彦、高崎正秀<sup>(18)</sup>両氏はこれから、金太郎は雷神の子で道場法師や賀茂別雷の同類と見ている。が、熊のほうも無視できない。

怪力童子の特徴は鬼歯にカム口頭で、生まれたときからその特徴を持つている。ばあいによると、そのせいで生まれるとすぐに埋め殺されたりもするが、生きのびればむしろ怪物退治の英雄になる。酒呑童子のばあいは鬼子として生まれ、そのまま鬼になってしまったのだが、彼を退治した側にもう一人の山姥の子、ここで問題にしている金太郎がいるわけで、これは、退治するものと退治されるものが同一存在であると考えられる。

「熊のジョン」では洞穴で熊と相撲をとって大きくなったジョンは、ある日大岩をどかして洞穴から母子が脱けだし、鍛冶屋に奉公

する。やがてその鍛冶屋で巨大な鉄棒を鑄造してそれを持って冒険旅行に出かける。冒険、すなわち王女救出も地下の龍の城で行われ、地下の要素、龍々熊、鉄棒と鍛冶屋が彼の性格づけをする。いずれも鉄工文化にかかわりがあるとされる。<sup>(19)</sup>

地下の小人と戦って手に入れた王女は、まさに、小人族の管理していた冶金術をさすとも思われる。

佐竹昭広は『酒呑童子異聞』一九七七で、伊吹童子、役行者、弁慶等「不思議な誕生をした子どもが深山に捨てられ、山の動物に守護されつつたくましく成人し、威力を世に振るう」例をあげている。「熊野の本地」もそのひとつである。佐竹はあげていないが、これは『史記』にある烏孫の祖や「隋書」にある突厥の祖が草原で捨てられ、烏や狼に養われた話に通ずる。<sup>(20)</sup>

もちろん、そのほかはロムルス神話にも行く。ランクの『英雄誕生神話』にそのあたりは詳しい。英雄は異常出生し、捨てられ、多く動物に養われる(ないしは牛飼、羊飼に拾われるが、これも動物の飼育者である)。

ヨーロッパの民衆の口碑ではこれがオルソンの話になることは言うまでもない。オルソン、すなわち「熊の子太郎」である。「熊のジョン」が熊の実子ならこちらは養子であり、熊も牝である。と言うことは同時に育った本物の熊の子の存在も想定される。

「ヴァランタンとオルソンの物語」、ニザールの『民衆文学史』一八六四に従って要約する。

フランス王ペパンは妹ベリザンドをコンスタンチノール王にめあわせる。一年がたったころ、町の大司教がベリザンドに言いよりはねつけられ、逆恨みして彼女を中傷する。王は妃を追い出す。フランスに戻る途中、彼女はオルレアンの森で双子を生みおとす。そこに一頭の牝熊があらわれて、双子の片方をさらってゆく。これがオルソンで、以後、熊の子として育てられる。ベリザンドがそのあとを追ってもう一人の子供の傍らを離れたあいだに、ペパンが通りかかって、残っていた子、ヴァランタンを拾ってゆく。それから十六年の歳月がたつ。オルソンは野生人として育って、近隣の恐怖のまとなってゆく。ヴァランタンは王から怪物退治の命を受け、森へ行ってオルソンと戦う。戦いは激烈をきわめるが、最後にオルソンが傷つきとらえられる。(異本ではオルソンがヴァランタンを組みつけたとき、相手が兄弟であることに気づいて手をゆるめる。その際にヴァランタンが逆にオルソンを抑えこむ)

宮廷へ連れてこられたオルソンはまもなく人並みの様子になりヴァランタンと親交を結ぶ。(一書では、全身の毛を剃ったところで、瓜二つであることから、兄弟であることがわかる)。のちにオルソンはコンスタンチノール王となる。(母親の名誉を回復して、位を受けつぐのだ)。

「熊皮男」はグリムのほかにアルニムの『エジプトのイサベラ』にも使われている。グリムでは第二版では「みどりの服の悪魔」ではなく「熊皮」になっていないが、アルニムの話を見れば、これが

「熊皮」として広まっていた話であることがわかる。しかし、「みどりの男」、つまり、木の葉をまとった「野生人」、「森の男」の性格もあることは見逃すわけにはいかない。(フオークロアでは熊と野生人、森の男はほとんど同義である)。

主人公が一文なしになって途方にくれていると悪魔があらわれて、契約を申し出る。着ているもの(みどりの服または熊皮)の交換だ。金はいくらでも使える。ただし七年間、顔を洗っても、爪を切ってもいけない。つまり野獣として過ごすのだ。それをやりとげると主人公は自由になり、美しい妻も手に入れる。狼男の伝承の昔話版と目される。(悪魔が熊とともに現われて、兵士に熊を殺してその皮を着るように言うばあいも、悪魔が熊に分出していると考えられる)。アルニムの挿話では、亡霊が農奴の前にあらわれて、熊を殺させ、その皮を着て亡霊の城で歩哨に立つ。七年たつと自由になる。

その挿話のあとで、現実の「熊皮男」がベラの前にあらわれる。墓場からぬけだしてきた亡霊で、アルラウネにこきつかわれる。

もちろんマンドラゴラの精であるコルネリウスにしても、泥人形のゴーレムでも、ジプシーの女王イサベラも、みなアレゴリックな人物で、「熊男」も現実の存在ではない。<sup>(21)</sup>

文学ではもちろんメリメに『ロキス』がある。女が熊にさらわれる。その後生まれた子供が「熊」的性格をあらわす。婚礼の日に花嫁を食い殺して森へ逃げ去った主人公は、そのとき「熊」になっていたのではないかと想像される。メリメはこの話をフランスの

フォークロアでも知っていたが、直接はロシアヤリトニアの友人から聞いたと思われる。<sup>22)</sup>

フォークロアではまず「熊の起源」の話がある。

猟師の妻がある日、亭主のあとをつけてみると、倒木の上で三回宙返りをして熊になったので、自分もまねをして牝熊になって、牝熊と一緒に森の奥へわけ入って、二度と戻らなかつた。これが熊の祖先であると言う。(セロシエフスキー、『ヤクト』、ディレンコワによる。<sup>23)</sup>

ディレンコワによると、熊から人間への変身の例はない。熊が人間の祖先になるのは牡熊と人間の女との婚姻による。

もっともディレンコワやボラタフの報告する話では、熊にさらわれた女が子を生む例はあつても、その子供が一族の始祖になったという例はない。「半分熊の怪物だつた(ショーツィ族)」で終りか、サガイの話のように、村人に子供が殺されるか、あるいはボラタフのあげた例のように、女が逃げるときに子供を殺してきたり、熊が怒って子供を殺したり、さらにはアンカラの話(ボラタフ)のように、王子が森へやってきて、子供を殺して女を連れ去つたり、村に帰ってから生まれた子供が一人で森へ入って戻つてこなかつたり(ディレンコワ、四二九頁)で、檀君神話に相当する獣祖説話は、この両論文には出てこない。

というのはもちろん、世間噺、ないし、半ば実話として語られている話を報告しているからで、各部族の「神話」を集めれば、獣祖

説話がないはずはない。<sup>24)</sup>(ハルヴァは「古代アジアにおいても、最初の人間のからだには毛が生えていたという観念がもとからあつたらしい」一一〇頁と言う)。

ディレンコワが、「熊の子においては、どの話をとつてみても動物性が優先しており、最終的には森へ行つてしまふ」(四八九頁)と言っているのは、やはり世間噺のレベルでのことで、昔話の「熊のジョン」では、熊の子が立派に人間界に受け入れられることは言うまでもない。<sup>25)</sup> もっともそこでも、村にいられなくて冒険に出てゆくことを人間社会からの疎外で、王女救出と地下世界での試練によつて、人間社会への復帰を認められるのだと考えられなくもない。

しかし、ディレンコワには昔話資料が完全に欠落していて、ここまでの見通しはない。そもそもポタニンが「北アジアの天の子の伝説」でタルタル族の熊の子が人々からも追いだされ、自分からも進んで村をとびだしてゆく云々と言っているのを引いて、「典拠を記していない」と注記しているくらいだから、昔話でその種の話が典拠を必要としないほど頻繁であることを了解していかないものと思われる。

「フロールフス・サガ」のビョルンとベラの物語は、継母に呪われて熊になった王子を許嫁のベラが認めて、洞穴で一緒に暮らす話だが、夜のあいだは皮を脱いで王子の姿になっているというから「美女と野獣」型の昔話に接続している。

ちなみに四二五番で「獣」が「熊」のばあいはフランスではドラ

リュリトウネーズのカタログの六六番、ヴァンデの例だけである。<sup>(26)</sup>熊以外では、豚、馬、鳥と、動物種は様々でフランスでは蛙や蛇が多いが、呪いをかけられて野獣になったということにおいては、動物種は何でもよさそうである。

四二五の類話の四四九『蛇の王子』でも、怪物は豚でも蛇でも、あるいは馬でもいずれも花嫁をつぎつきに「食い殺す」存在で、現実の動物種としては狼か熊に近いのだろうが、語りの場ではむしろ、人間など食べそうもない動物として描かれる。

熊楠は「古え熊をトテムとする民族ありしやらん」(「本邦における動物崇拜」と言っているが、神武天皇の条り以外、文献には熊信仰の痕跡は乏しい。彼の引く『北越雪譜』の例も、熊を殺すと祟りがあるという言い伝えで、その手の話なら蛇の祟りなどのほうが例が豊富であろう。『想山奇聞著集』の例は、「祟り」云々を否定している例で、熊を捕る方法を語っている。

熊を捕る話は松山義雄の『狩りの語部』に種々出ているが、信仰の色彩は薄い。遠山谷野「熊祭り」は、捕った熊を洗い清めて、筵に坐らせ燈明や酒をあげ供えものをしてから酒宴に移ると言うが、松山も、これを「矢祝いの変形したもの」(二六頁)と見「熊に限らず狐のあたる度ごとに(…)狐運を祝ったもの」であると云う。熊が特に神として祭られていたものではなさそう<sup>27</sup>だ。穴ごもりから出るときも、別に固有のフォークロアを形成するには至らなかった。

いや、実はシベリアのシャーマニズムで、熊信仰が見られるほか

は、アイヌの熊祭りがあるくらいで、世界的には熊信仰はさして厚くない。フィンランドはシベリアの諸民族と近く、そのせいか『カレワラ』にはよく熊が出てきて、熊の足の下から鉱物が出てくるとか、鍛冶のイルマリネンが熊と戦う場面などがあるほか、四六章(リヨンロット編、小泉保訳による)には「熊祭り」の叙述もある。

小泉保の『カレワラ』解説では、「冬の終わりに男たちが隊伍を組んで熊の冬眠している穴に向かう。その穴の前で火を焚きこれを飛び越して身を清めてから熊を棒で追い出して、槍で殺す。(…)「熊の宴会」の当日は晴着の隣人、招待客が寄り集まってくる。そこで雄熊なら少女が「花嫁」として、雌熊なら少年が「花婿」として選ばれてテーブルの上座につく。(…)食後骨は集められ、その翌日人々は熊の首を携えて「婚行列」よろしく出発し、頭蓋を木の上に吊るし帰ってくる(四四〇頁)」とある。

『カレワラの錬金象徴』という本の中でギョは熊を鍛冶の象徴としている。しかし熊と鍛冶の関連は、それほど強くはない。「熊の誕生」の章も「鉄の誕生」の部分と必ずしも重なりあわない。

それに、『カレワラ』では、「祭り」はともかく、信仰の対象としての熊は描かれていない。フレイザーによればアイヌのそれも含めて各地の「熊祭り」も信仰ではない。(『黄金技』)。

人狼のように熊に変身する話はシベリアやフィンランドで報告されている。ただしその一部はすでに見たような「熊の起源」神話であり、随意の変身ではない。

ウノ・ハルヴァによれば「トウルハンスク地方では、樹のまわりを三度這って熊の唸り声をまねれば人間は熊に変わることができる(…)ヤクトの場合には倒れた樹の幹の上を三度、跳んで跨げばよい」(『シヤーマニスム』田中克彦訳、一九七一、四〇一頁)。

プラヌーフによれば(スコルト族の伝承)「梢が北のほうに傾いた木を見つけ、そのまわりを東から西へ三回這い回ると熊になる」(五四頁)。奇妙なのは、「反対に回ると狼になる」という記述で、やはり人狼伝承との接続が考えられる。

先の「熊起源」説話の異伝と目されるものにつきのような話がある。

「昔、一人の老人と息子が住んでいた。息子は鹿狩りの名手で、嫁がいた。毎年、秋になると、息子が狩に出ているあいだに老人は姿を隠して、春になるまで戻らなかつた。ある年、老人がどこへ行くのか知ろうとして、嫁がそのあとをつけてみようと思いたつた。ある日、嫁が見ていると、森へ行つた老人は、傾いた木の回りを何度も回って熊になった。嫁も同じように木の回りを回って牝熊になって老人のあとを追って追いついた。

老人は嫁に気がついて言った。「とんでもないことをしたもんだ。おまえの亭主が狩りから戻ってきて、おまえがいないことがわかつたらさがしに来る。しておれたちの足跡を見つけたら、本当の熊だと思って、撃ち殺される。しかし何とかおまえが助かるようにしてみよう。わしの言うとおりにするんだ。まず、熊が一頭しかいな

いように思わせるために、わしの足あとの上を歩いてこい。(…)おまえの亭主は穴に一頭しか熊がいないと思うだろう。そこでわしが出ると、わしを仕止めて、皮をはいで、穴の入口にそれを広げるだろう。そしたらおまえがその上を、触らないようにして跳ぶんだ。そうすれば人間に戻れる。(…)

しかし、跳んだとき片足が毛皮に触ってしまったので、そこだけ熊のまま、爪がのこってしまった」。

問題は、この「熊娘」の子が熊になったかどうかだ。あるいは「熊のジョン」の子でもいいが、日本の蛇女房の子孫のように、各地の家族の家系を異類の子が形成することが一國のレヴェルでなくともなかつたのかどうかだ。

大林太良は『北方の民族と文化』一九九一で「アルタイ・タタール族、エヴェンキ族の一部などにおいて、雄熊と人間の女との子孫という家系がある」(一八六頁)と言う。ただしこれが、ボラタフやディレンコワの紹介した「熊による婦女誘拐」譚の異伝で、ふつうは殺されたり、森へ帰ったりしてしまふ熊の子が村に残つた特殊ケースでないかどうかは問題だろう。独立した話型としての始祖譚か「熊にさらわれた女」のヴァリアントかだ。

「熊祭り」についても、「殺した熊の頭を高いところにかかげる習慣」が広く見られると大林氏は言うが、犠牲獣の頭や皮を竿や柱の上に高くかかげる風習はもつと広く分布しており、ハルヴァやディレンコワによると、熊祭りを行う部族でも、馬の同様な供儀のほう

が主であるときれている。それに熊祭りが必ずしも熊信仰ではないことも注意を要する点だ。檀君神話も、卵生神話文化圏の中で偶発的に記録された特殊な神話かもしれない。

日本本州での「熊祭り」は狩猟伝承であり、狐獣への作法であったと思われるほか、熊野神社を祀る地域では、熊野と熊の類推から「熊が熊野権現の姿もしくはその使はしめである」(千葉徳爾『狩猟伝承研究』三七六頁)とみなされていたとしても、いずれも「熊」は神そのものではなく、神は「山の神」であった。その点はアイヌにおいても根本的には同じで、熊そのものが神ではなく、神は熊に宿ってきた目に見えない存在なのだ。それも、稲荷信仰で狐が、庚申信仰で猿がそれぞれ神の眷族であるというよりさらに薄い関係しか神そのものとは持っていない、むしろ、神馬とか神鹿というものに近いようにさえ思われる。

つまり、「オイヌさま」のお礼のように「クマ札」があったわけでもなければ、稲荷社の鳥居脇に向きあって坐る狐のように熊が番をしている神社があるわけでもない。もちろんアイヌにしろシベリアの諸民族にしろ、「神社」や「偶像」の観念がないのだと言えればそれまでだがシベリアのシャーマンが熊に扮したり、熊の手をつけたりするのを見ても、「熊」は「神」を呼びおこす「手段」であって、神そのものではないように思われる。

熊を犠牲に捧げたり、竿の先にかかけたりするばあいも、熊(や馬)そのものを神としてあがめるのではなく、天上にいる神にそう

やって供物をさしだすのだ。

むしろ、農耕文化に移行してからの春の豊饒祈願における「熊殺し」、「熊」との模擬性交、あるいはその延長としての性的動物である猿との役割交代における怪物(猿神)退治、あるいは、金属文化の象徴としての「熊のジョン(ないし金太郎)」の物語のほうに、「信仰」との接続が見られるが、それでも「熊」には、ついにどこでも明確な信仰は特になかったのではないかと思われる。(ブラウロンの「熊祭り」も、アルテミスに仕える「熊娘」たちの祭りであろうし、「熊の女神」アルティオについてはブロンズ群像がひとつ出土しただけである)。

女が神域としての山(森)にのぼって、山の主としての熊(あるいは神の化身としての熊)に迎えられ、秘儀再生の洞穴で神に仕え、神の子を身ごもって、春、地上に戻る。神話ではその子が国祖となる。英雄伝説ではその子が武勇と怪物(鬼)退治で名をあげ、世間では、熊の子は殺される。日本では熊と猿の役割交換とともに猿神退治譚と猿舞譚において、その逸話変容の後半の段階が保存される前、神との出会いは龍蛇神話に吸収されてゆく。

一方、王者、英雄が同じ聖域(山・森)に足を踏み入れると、山の神は、まず猪、熊などを送って惑わし、それを乗りこえたばあいに女神としてあらわれ、山中の秘境、海なら龍宮にあたるところで王者をもてなして、やがて秘宝を与えて地上に送り返す。王者はその秘宝(鉄剣または宝玉あるいは魔法の箱)をもって敵を平定し、



地上の覇権を握る。秘境庵留、あるいは神との交わりは、瞬時の幻であることもあり、地上の三百年にあたる三年であることもある。

シャーマニズムにおいては往々にして熊の変装が用いられ、神との出会いと、物質の変成（利剣の鍛造）のプロセスが模倣される。

定着農耕文化においては、水乞いや豊稔予祝に宗教儀礼が移行し、動物種が変化（龍蛇神あるいは「緑の狼」、あるいは狐）するか、または、「神の犠牲」、神を殺して新生を期待する儀礼に移行する。カーニバルにおける「熊殺し」はその最後の段階にあたる。

アーサー王はその名前から（アルト）熊の継続であるとされる。彼は山間の湖で妖精から利剣エクスカリバーを授かる。

ギンガモールは猪を追っていて、森の中で迷い、湖のほとりで水浴びをする妖精に出会う。

レモンダンも猪狩りで、猪とともに主君を殺して、途方に暮れて森の中をさまよううちに、泉のほとりで歌を歌うメリュジーヌに出会う。彼女は龍蛇妖精である。妖精はいずれも騎士に愛と、ふしぎな力を授ける。

神の先触れをするものは、猪が多く、鹿（「グラエランのレ」）熊がそのつぎに来る。この三つは狩猟獣として代表的なものである。このようなケースでたとえば狼や猿が神の先触れをするようなことはない。

女神は龍蛇身か鳥（白鳥、鴨）が多く、ここで熊が出ることはない。（インディアンにおける「熊女房」譚は、「熊克蘭」の女との

熊のフォークロア（篠田）

族外婚説話の要素が強く、またそのさいの動物は大での類話が多く、神的要素は乏しい）。

しかし、そこで、神との婚姻を、物質変成の錬金象徴において見るときには『カレワラ』におけるように熊と狼が出てくる。（狼は牧畜文化にともなって登場する）。

金属文化以前でも、シベリアでは熊文化複合が認められている。そのばあいは狩猟獣としてよりは人間の生死を司るもの、森の王、山の神としての性格が強いだろう。シベリアの諸部族に「トナカイ文化複合」と「熊文化複合」の二分化が考えられているが、死の脅威をもたらし、かつ冬ごもりにおいて死と再生を象徴し、その強力な力で、生産と破壊を代表する熊の役割と、狩猟獣としてのみのトナカイのそれは当然、平行はしないだろう。

しかし、英雄や王者の伝説、神話は、社会集団が形成され、金属が使用され、三機能が分化しはじめるころにならなければ、のちに残るような形ではあらわれない。そのときに異常出生をした息子が森に捨てられて野獣に育てられ、マサカリや鉄棒を持った鍛冶王として登場するときには、女と山の神との婚姻譚が利用され、この英雄が長じて、鬼退治をすれば、まさに父性的存在との対決と、女神との婚姻があつて、熊神話の男性版と女性版が両方とも使われることになろうが、そこまで行けば、この英雄は智略をもって国を創始する文化英雄で、動物身の自然神崇拜のレベルを抜けだしてしまふ。

純然たる信仰であれば、神はそこまでの接触を人間に許さなかったはずで、金太郎に投げとばされる熊はもはや神にはなりえず、「熊男」だった金太郎も頼光に拾われて毛を剃られ、髪をそろえられれば「人間」になってしまふ。

聖域の神は、人間が熊男の毛を剃るように自然の刈りこみ、開墾を行ってゆくうちにしだいに追いつめられ、やがて人間に支配者の位をゆずってゆく。

それでも穴ごもりによって地中の富と秘密の管理者とも思われた熊は、金属文化の象徴ともされてしばらくは生きのびたが、あらゆる部族が金属を持つようになり、その中で、とくにすぐれた鉄剣の秘密を保有したものが平原の覇者となってゆく過程では、むしろ草原に住む狼クランなどに勝利の機会が多かった。

ロシアのフセスラフ王、ベルギーの王バボ、あるいはモンゴルの「蒼き狼」のように、人狼戦士が覇権をとまえ、年代記に名を残してゆくとき、熊男金太郎は、頼光や綱の引きたて役をつとめたあと、いづくともなく消えていかねばならなかった。(アイスランドのサガに歌われた熊男の英雄たち、エギルその他も、実際には熊であるよりは「夕べの狼」だった)。

狼は社会的な動物であると言い、熊は、むしろ社会的人間の抱く「子宮還帰」の夢をその洞穴性によってあらわす退行的動物だと言う。(ブライヌーフ、一四九頁)。

「熊のジョン」や金太郎は、父親熊を打ち破ってその母性的洞穴

から出てくるのだが、熊のジョンが怪物退治に、また地下の洞穴へもぐるように、そして金太郎が頼光死後はまた足柄山へ戻って姿を隠すように、彼らはたえず母性へ回帰しようとし、昼の世界の支配者にはなりえない存在なのだろうか？<sup>(29)</sup>

いやまさに熊は、人間が高度な社会を形成する以前の、洞穴時代のパートナーであり、神だった<sup>(30)</sup>。人間が洞穴を出、草原を馬に乗って疾駆したときから、熊はすでに古い昔の思い出になっていった。森の動物たちで、騎馬の人類の後ろに追走してきたのは狼だけで、その狼が、牧畜をはじめた人間たちと、その食性と好み的一致から、たえず行動をともにするようになる。社会的動物(ドロール)としての狼は人間社会の「影の社会」を形成する。

しかし、やがて人間は、犬を飼育して狼に対抗する。犬ももとは狼だった。狼のもっとも文化的な形が犬だった。「影」としての「狼」は、いまや「犬」として、人間社会の中に入りこんで生きのびる。熊には信仰の世界でも、もはや入りこむ余地はない。熊は原始的な狩猟文化における獲物であり、パートナーであり、原郷としての「洞穴」をあらわすもの、つまりは「神」だった。

その「古層」の記憶は、いくつかの「原神話」と、異類婚姻譚、異常出生譚に、ときに猿や怪力童子の仮面をかぶってとどまっていた。しかし、信仰はとだえた。「熊」をかかってトータムとして崇拜した部族も、すでに文化の表面からは駆逐され、狼クランにとってかわられ、その狼もすでに人々の記憶からは消え去ろうとしている

注(参考文献は邦訳のないものもすべて日本語に訳して示した)。

(1) 三原幸久『スペイン民族の昔話』一九六九、福田晃氏も、それに従っている。しかし、このふたつの伝承が同じタイプの話型であるというところで、「熊のジョン」が「熊」を必ずしも必要としないように、「諏訪縁起」も「熊」との関連を持つ必要はなく、事実、諏訪と熊は関連が薄いだらう。甲賀三郎はむしろ蛇体である。ただし、狩猟伝承一般との接続は諏訪では薄くはない。

なお「熊のジョン」についてはダニエル・フアーブルの「熊のジョン研究」『人類学研究所紀要』一九六九、を参照。

(2) シュミットライン『ロキス校注』『ロキス』の中のどの部分がフォークロアで、それが文学的解釈かは、たとえば同じ作家の『コロンバ』のどの部分がコルシカの地方色で、それが作家の固有の世界かという議論と同じである。『カルメン』からスペイン色や闘牛の風俗を除去し、「エトルリアの壺」から地中海色をとりのぞいた部分を、『ロキス』から除去すれば、『ロキス』固有のフォークロアがうかがわれる。

(3) ボルドロン『ウーフル氏』、一七一〇。キュザックの『ランド地方伝説集』一八七四では「人狼は夜間、戸外を徘徊する。身体には熊の毛皮をまとって四つ足で歩く」と言う。

クヴィーデランドの『スカンディナヴィアの民間信仰と伝説』一九八八では、「人狼」の項に「熊男」を入れている。

ただし「人狼」伝承の変型である「狼使い」伝承で狼と熊がすりかわることはけっしてない。「熊使い」はジプシーの見世物芸人である。(4) 後述するようにアルル・シユル・テックの熊祭りには有名だが、サン・ローランド・ド・セルダン、ブラッド・モロにも同様の祭りがあり、アメリカ・レバンでは一八八〇年まで蠟燭祭の日に熊狩りを模倣した神事が行われていた。アルジュレ、ジェードル、リュス、アンドール、

熊のフォークロア(篠田)

アンカン、エスカルドなどで、熊狩りの模倣が行われる。(ミッシェル・ブラヌーフ『熊と人間』一九八九)。

ゲニューベは「カーニヴァル」の中で、二月三日、聖ブレースの日に注目している。聖ブレースは彼によればまず熊の聖人であり、ついでこの日は羊毛や織物工の祭りだ。ところで昔、織物職人は放浪職人で、特定の説話の伝播に貢献した。また、その非定着性を利用して、迫害をのがれる異端の徒が彼らの中にまぎれこんだ。

「熊」ないし「森の男」は全身を毛でおおわれている。その毛から羊毛が想像される。

ドイツではカーニヴァルにエアプセンベール(豆熊)、またはシュトローパー(藁熊)と呼ばれる熊のぬいぐるみがある。この熊は追い回され、叩かれ、最後は殺される。

ブラヌーフはこの他に、ポメラニアやバヴァロワにおける「麦の許嫁」と称する最後の刈束が「熊」であらわされる例をあげているが、もちろん、これは一般には「狼」であらわされる。フィンランドでは、かつて収穫のときに羊の年仔が犠牲にされ、その血と内臓が「熊への支払」として土にまかれたと言う。殺霊として熊が信仰されていたあかしである。

これとカーニヴァルの熊は必ずしも一致しないかもしれないが、バルカン半島では、ジプシーの伝承として熊のカーニヴァルが行われる。多くは毛皮をかぶって熊のふりをした男が殺されてから、復活させられ、無礼講になる。ジプシーの熊伝承は「熊使い」の伝統にかかわっている。

なお西田長夫の興味ある見解を紹介しておこう。「フランスのある地方などで現に今日でも行われつつある熊祭りの祭儀のごときに、その源流を同じくするものであると考えるものである。わが熊野信仰も、このフランスの熊祭りも、廻りさかのぼりしていけば、ついに同じ源流に到達するといいたのである」(熊野信仰の源流と文学)『日本神道史研究』二巻、一九七八年、三一六頁

西田長夫のこの説がゲニユベの示唆によるものであることは興味深い。西田とゲニユベはパリで出会って意見を交換している。

(5) 大林大良はシベリアに「トナカイ複合と熊祭複合」があるとガースに從って言う。(『北方の民族と文化』一九九二)が、そのガースもまたハロウエルも、トナカイ狩猟に関連する文化にあとから熊祭りが一部に導入されたもののように考えていると思われる(大林による)。

シベリアにおける狼と熊の分布区分はいまのところまだはつきりしていないが、南ヨーロッパでは狼と熊の「住み分け」ははっきりしている。ことにフランスでは、熊はアルプスとピレネーの山岳部に限られ、平野部は狼である。クチュリエ『ひぐま』、ブレーム『動物の生活』らによると、昔はフランス全域に熊がいたと言うが、昔からの伝承でも平野部には「熊にさらわれた女」の話などはない。「熊のジョン」はほぼ全域にあるが、熊の子としての出生を語るものは平野部では少ない。

一方、ピレネーでは狼の伝承は希薄である。ただしサンチャゴ巡礼路沿いに(平野部だが)狼を示す地名がたつらなっているのは注意される。

わが国ではアイヌの熊祭り、関東以西の三峯信仰とははっきり範囲を異にしているが、後述するように、熊が狼、狼が狐と役割を交換するとすれば、「住み分け」より「混住」が認められる。松山義雄の『狩りの語部』一九七七では、伊那に熊と狼の風俗が猪のそれとともに混在している様子が見てとれる。ただし、西欧と同じく、熊は狩猟獣だが、狼は害獣退治以外の目的では狩りたてられない。

『北越雪譜』では「熊は和獣の王、猛くして義を知る」とある。一方「獣中最可悪は狼なり」とも言う。役割は画然と分かれている。なお、今道友信は「日本の幻想」(『日本の美学』一七)の中で、「狼祖霊の原始野蠻の時代が去り、いささかでも伝承神話が形成される頃(…)熊が祖霊的な神、運命の支配者として彷徨していた」と説く

が、どうだろうか？

(6) 「ケルト族においてはマルクが馬であり、オスカーが鹿であるように、アーサーは熊の人格化されたものである」(プラヌーフ『人間と熊』一九八九、三九頁)。

「アーサーの名はあだ名であって、『熊の外見をもった』という意味である」(マルカル『ケルト神話』一九八六、二二頁)。

「熊はケルト族の聖獣であり、戦士階級から出た王権を象徴する」(同、一七三頁)。

(7) ムリ出土(一八三二)のブロンズ群像、バッハオーフェンは、動物神表現のひとつとして、本来熊の形の女神が、女神と熊に分離したと見、クリスタンジェは、熊と女神の婚姻をあらわすと見る。(『古代スイスの神話』一九六三)。

なお、ベルンの市の紋章は熊で、市内に熊の公園があるのは周知のとおりである。あるとき、この熊の濠に一人婦人が転落し、熊によって洞穴に連れこまれたと伝えられている。

ベルンの名の由来は、この町の創始者が城を建てるとき熊を殺して埋めたからだと言う。

(8) 伊藤清司の研究によると、この話は朝鮮、中国の他はラオス、カンボジャ、ビルマにあり、「同一の起源をもつ」(『昔話、伝説の系譜』一九九一、一七二頁)。その分布範囲は「河童駒引伝承」の分布より南に片寄るかに見える。

もっとも、「再婚型、炭焼長者譚」がカマド神起源譚だと説く氏の説には多少納得しかねるところはある。日本の昔話では落ちぶれてたずねてきた先夫が死んで「カマド神」になった話は多くはない。

(9) ランク『英雄誕生の神話』(一九〇九)「ほとんどすべての主要な文明において、同じタイプの英雄の誕生と追い立ちが語られる。そこには「普遍的で基本的な観念」がある。

いわゆる「自然発生説」の全面的適用には批判が圧倒的だが、逆に全面的伝播説にも疑問がある。伝播にも淘汰があり、選択がある。基

本構造に基く類似の説話が伝来してきて伝承を強固にすることもある。一切、他の影響を受けずに純粹に保存される伝承など存在しない。

(10) 畑井弘『天皇と鍛冶王の伝承』一九八二、日本に関するかぎり、鍛冶や採鉱が特定の人々によって行われており、そこに一定の伝承が随伴していることは確實であろう。そしてその技術がはじめは中国・朝鮮から来たこともたしかだろう。中国にも当然、近隣諸民族との接触、交流があり、さまざまな技術がそれにまつわる説話とともに吸収されたであろうが、そこがあまりに強力な文化のルーツボであり、先進地域であるために、あらゆる文化が素材としてそこに投げこまれ、独自の産物として出てくるような印象が生まれる。

(11) 関敬吾『日本民族と南方文化』一九六八

「龍退治」と「猿神退治」はまず構造が同一である。と同時に、龍と猿とのちがいを除けば、構成要素はほとんど同じで、犬を連れた遍歴の冒険者が怪物を殺し、人身御供の娘を救って結婚する話で、とくに「犬」の働きが注目される。また、日本の「猿神退治」譚は、怪物が大蛇のばあいも含んでいる。ただし、「つづら」「長持」に入れられて怪物に捧げられるモチーフは西洋にはない。

(12) ボワイエ『分身の世界』一九八六、

同、『アイスランドのサガ』一九九一、

ベアリンググールド『人狼の書』一八六五、

デュメジル『戦士の禍福』一九七〇、

エリアーデ『神秘的誕生』一九五九、

タキトウス『ゲルマニア』に、チャッティ族の戦士は敵を殺すまでは髪も髭も切らないとか、タイフアリ族では猫か熊を仕とめるのが戦士になる条件とあり、エリアーデはこれらをベルセルクルの条件としている。

「ベルセルクル」を結社の風俗と見るかどうかは微妙である。「ベルセルクル」という表現はアイスランドのサガにはたしかに出てくる

熊のフォークロア(篠田)

が、集団や結社をさすよりは、個々の英雄の勇猛さ、あるいは「狂乱」をあらわすときに用いられている。定義としては「獣皮をまとうて、獣になりきり、火も刀もはねのける身体となって、狂乱のうちに殺戮を行うもの」だが、人狼伝承と同じく、「獣皮」も「変身」も象徴的表現とも受けとれる。

狼についてはブルズイルスキーが「狼戦士団」の存在をかなりなまで論証したが、熊についても同じものがあつたかどうかはわからない。むしろ、ゲルマンの人狼戦士団の風俗が北欧に伝わってきて、地域的偏差として狼が熊にすりかわって伝説化したのではないかと思われる。

のちの秘密結社が山中にこもったときにはかえって、入門儀礼として「熊」が利用された可能性はある。

コーシャル・デルミイの『カルボナリと炭焼木挽』一八二二には、熊と戦って相手を組みふせることが結社の入会試験として課されていたと書かれている。「まずはじめは薪を積みあげる作業が課された。私が一心に働いていると恐ろしく大きな熊が一頭、襲いかかってきた。」(一五頁)この熊を組みふせると、相手は毛皮をむしって、仲間であることを示して入会試験に合格したと告げる。

(13) ピエール・プリュレ『アテネの娘、古典時代におけるアテネの娘たちの宗教』一九八七、

リリアンヌ・ボドソン『古代ギリシャ宗教における動物の位置』一九七八、

ピエール・レヴェック『アルカディアの信仰、熊娘、狼男、馬神』『歴史通信』一九六一、

ただ問題は、この「熊祭り」がその地域でどれだけ的重要性を持っていたかで、狼祭りや猪祭りと混在していたのだったらとくにこれをもって熊文化があつたとも言えないだろう。

(14) ピエール・グリマル『ギリシャ・ローマ神話辞典』、  
A・B・クック『ゼウス』一九一四

カリストがいつアルカスを生んだのかは微妙だが、熊になってからならアルカスは熊の子である。ところでリユカオンがゼウスに人肉を供した話のひとつでは、料理されたのはアルカスで、それに気づいたゼウスがテーブルを覆し、アルカスの身体をもとどおりにして生き返らせる。なんといつてもゼウスの実の子なのだ。

- (15) ロベール・ボッシュ『熊トーターム』一九八七、  
クロード・ゲニューベ『カーニヴァールとカレームの戦い』『アノール』一九七二、

へネップによるとカタローニヤの熊祭りは文献では一四四四年にさかのぼると言う(ゲニューベ『中世の民間宗教と民衆芸術』一九八五) クリスタンジェは、ロゼッタを護衛する四人の男のヤヌスの仮面をもって、古い年と新しい年と見る。日にちも二月二日だと言う。(プラヌーフは蠟燭祭のつぎの日曜と言う)。

- (16) 「前かけ」はシモンセンに言わせれば女の生殖器官の延長である  
『昔話の変数』一九九〇。当然、ロゼッタと熊の性交が予想される。

このあとの「毛剃り」は『ヴァランタンとオルソン』のモチーフの混入であろうとゲニューベは推測する。前半は「熊のジョン」、すなわち、秘儀の洞穴からの誕生に相当すると言うのだが、「冬の王」を追い回して殺して春の復活を祝うのだし、熊は殺されるのだから、「熊のジョン」とは少しちがっている。

- (17) 沢田瑞穂は『中国の動物譚』で、「熊夫人」の伝承をいくつか紹介している。しかし沢田自身「熊に関するものは以外に少ない」と言うように、この種の話では「虎女房」のほうが多いようだ。『子不語』というテキストだと、狩をしていた役人が深い谷に落ちたところを牝熊に助けられ、洞穴で一緒に住み、子供が生まれる。この子が長じて役人になり、父母を車で迎えに来た。

もちろん女が牡熊にさらわれる話もあるのだが、虎や熊が女の役を演ずるケースが中国朝鮮において目立つのは興味ぶかい。猿でさへ、

山中に迷った男が猿の一族の掣になる。狐はもちろん女である。樹木の精や、死霊も多く女になって男のもとに通ってくる。老母が虎になつていたという話は別の話だが、それでも異類は女で、それに対する人間は男だ。ところが西洋のばあいは熊は牡であり、日本では、狐、鳥、魚が女、蛇、猿、犬、馬が男と分かれている。

なお、関敬吾は『昔話の歴史』一九六六の中で、神の子の異常出生譚として、動物から生まれたものでは狐について熊の子が多いと言う。(もちろん蛇の子は他の範疇に入れているのだろう)。「信州の伝説によると、狐師が山中で熊に誘われて穴の中で同棲する。のちに子供が、その狐師の家の軒下におかれてある」。(著作集II、九二頁)しかし、そこで言われているような例は多くはないのではなからうか。『北越雪譜』の「熊人を助く」の話で、「其熊は牝熊ではなかりしかと三人大ひに笑ひ」とある。古代の神話を近世の庶民は笑話にするのだろうか。

- (18) 大島建彦「山姥と金太郎」、『天文学』(浜田義一郎論)一九七九  
高崎正秀『金太郎誕生譚』一九三七、

寝ているうちに神怪と通じて子をはらむ話是一種の処女懐胎譚で、ヨーロッパでは魔法使メルランが地獄の悪鬼の送った淫夢魔と清浄な処女とのあいだに生まれる。

天からつかわされた雷神の子は、しかし、地上で長く栄えることを得ず、いずれはいずくともなく消え去ってゆく。一種の「かぐや姫の運命」である。

- (19) ジョンの鉄棒と鍛冶文化の関係はあきらかである。金太郎のマサカリには、特にそれを鍛冶するところも、またその特性についての記述もないが、高崎氏は「石工、土工、薪炭、採鉱冶金などの職務を世襲した者」たちである穴太郎に関わりがあると見ている。(前掲書三八頁)氏はほかにフィンランドの雷神ウツコヤトールの槌と金太郎のマサカリを関係づけている。もちろんゲルマンの「槌を持った神」もいる。なお、西田長男氏も、「熊野信仰の源流と文学」で、フランスの

「熊祭り」の鉄棒を「遠く極東のわが国に伝えられては、坂田の金時のかついでに鉞に変化するにいたった」と見る。(三二四頁)

熊のジョンは冒険旅行において、特製の鉄棒を持っていったが、怪物退治でこの鉄棒を使ったあと、地下から地上に戻るときにはもう鉄棒は持っていない。二度目の地上への帰還が第二の誕生にあたるなら、このときにはふつうの人間として生まれなおしたので、熊や鍛冶王の性格はもうなくなっているのかもしれない。ちなみにその鉄棒は、地下で父としての怪物を殺すのに使われ、ついでに母性的な老婆を叩きのめすのにも使われる。

また、一回目の誕生のときに生えていた全身の毛は、二回目の誕生においては消えている。

ダニエル・ファープルとポール・ラクロワがエロー県で採集した「熊のジョン」だと主人公は途中で鉄棒をなくしてしまい、それを地下世界へさがしにゆくことになる。

地上と地下は二重性を持っていて、地下にも当然、鍛冶がある。しかし、地上の鍛冶で作った鉄棒は使いものにならず、地下の鍛冶で鍛造した鉄剣を主人公は必要としたのだとも読みとれる。

一方斧についてはつぎのような見解がある。

「北欧では斧は大地に実りをもたらす雷光神が使う武器だったが、それゆえにまた共寝と婚姻の象徴でもあった」H・P・デュル、『再生の女神セドナ』一九八四、原研二訳一九九二、四〇五頁。

つまりは天格的な性格である。金太郎が鉄棒ではなく「マサカリ」を持っていたことは、天索性、雷神性を示している。あるいは、文化性でもあるかもしれない。「野生人Ⅱ森の男」は木製の棍棒を持っている。棍棒―鉄棒―斧と文化の発展の度合いが示される。

(20) 高橋昌明は酒吞童子が住んでいる「御殿」が龍宮城に似ていることから、酒吞童子Ⅱ水神説をとなえている(『酒吞童子の誕生』一九九二)。高崎正秀も金太郎Ⅱ河童説を提唱した。そもそも彼ら怪力童子が龍Ⅱ雷神の子なら、彼ら自身が龍神であつても一向にさしつかえな

熊のフオークロア(篠田)

い。ただし細の老母の話から「鍛冶屋の婆」を連想する谷川健一は、これをすべて鍛冶伝承とする。鍛冶と龍蛇神ももちろん関係はある。(21) 熊の皮の昔話では、ペローの「ロバ皮」のものとなったペンタメローネの「熊皮」がある。王女はロバの皮ではなく熊の皮を着て王宮から逃げる。しかしイタリヤでは熊の痕跡は希薄である。にもかかわらずなぜ熊が使われたかと考えると、ひとつはアルテミスⅡカリストのイメージで、異性を避ける娘の象徴でもあろうかと想像される。もうひとつはまったく根拠のない恣意的選択で、昔話らしい荒唐無稽である。「燭台の中に隠れて」などというものもある。

その際、燭台の中に一人の人間が隠られるのかどうかといったことは(たとえば桃の中に子供が入りうるかということと同じく)昔話の論理では意味をなさない問いだ。

もちろん、「ロバ皮」については、古語で「アヒル」をあらわす語が同語であることから「アヒル皮」であり、「モンフォールのアヒル」という伝承と同じく、男の性的要求をのがれるために神に祈って姿を変えてもらった話なのだという説もある。

しかしそのばあいには、「熊皮」の説明がつかない。熊とロバは動物象徴学の中では近縁で、いずれも東方の猿の持つ性的イメージの担い手であることはグベルナチスの説くところだが、「黄金のロバ」なら性的動物でいいが、「ロバ皮の王女」にはたして好色性があるのかどうか疑問である。王女の変装は、熊でもロバでもアヒルでも、あるいは燭台や長持でも、いずれも切羽つまった危急のさいの突破の選択で、意味のあるものではないとおこつ。

(22) この物語の主人公セミヨット伯には同名のモデルがいた。そのセミヨット伯から、彼の家に伝わる伝説をメリメは聞かされていた。シュミットラインがセミヨット伯のメリメあて書簡を紹介している。

ただし、話の基本的な部分は『イルのヴィーナス』と同じで、「血まみれの婚礼」のテーマである。幸せな婚礼を破壊する要素として古代の女神像を持ってきて、森の野獣を喚起しても本質的にはかわり

はない。

フランス文学ではこのほかにユーゴの処女作、『アイスランドのハン』がある。洞穴に住む半野性人のハンは、白熊を友としている。牝熊とは作者は言わず性別を明示しない言い方をしてはいるが、熊を妻としている男の物語である可能性はゼロではない。もっとも直接的には、熊は、ハンの野獣性を象徴する。そしてハンの「妻」に関する話としては村の娘をさらっていった洞穴に閉じこめて妊らせた経緯がある。ハンは敵の首を素手で引きちぎり、殺した敵の頭蓋骨で酒を飲む。

(23) N. P. テイレンコワ「シベリアのトルコ系民族にみられる熊信仰」

『アメリカニスト学会報告』一九三〇。

狐師と妻ではなく、父親と嫁であるという話もある。

なおディレンコワは、シベリア諸民族にはかつて広範囲に「熊信仰」が存在して、いま残っている「熊祭り」や熊に関する儀礼がその名残であると言う。

「フィン・ウーグリアン系の部族においては、熊そのものが天からやってきた強力な神とてあがめられる」(エヴリーヌ・ロットルフ「アルタイ族においては地下世界の王エルリクは巨大な熊の姿であらわれる。しかしそれは本来の姿ではない」。(同前)

そして熊は神より人間に近いもの、すなわち文化英雄であるとする説もある。(井上絃一、「北方狩猟民と熊祭り」『どるめん』十一号)

「熊が冥府とこの人の世との間を往復する精霊の一種であると考えられていた」(西田長男「熊野信仰の源流と文学」三四一頁) というのはどのような文献に基いてされている発言かわからないが、洞穴を冥府の入口と見れば、冬ごもりの習慣とともに、うなづかれないこともない。ただ、冥府とこの世をただ往復する精霊はいなくて、冥府へ行くときには人の魂を運んでいかななくてはならないとすれば、生死の管理者として、つまり、「人食い熊」の性格が強くなければならない

が、どこでも熊はそれほど有効な死の使者ではなかった。もうひとつ熊には憑霊信仰での役割が古代シャーマニズム以後見られない。

(24) ジャン・ポール・ルーは、「人類ないし一族の起源を熊と女との結びつきに求める神話はアジア北部やシベリアにおいて多数認められる」(「アルタイ社会の動植物」一九六六、三〇四頁)と言っている。井上絃一「北方狩猟民と熊祭り」『どるめん』6・11号は「トルガニ伝説」を紹介している。

ハルヴァもシユテルンベルクを引いて、「熊から始まったとする種族」として「テレットコエ湖の東岸に住むテレンギット系一族であるカラ・テレス」をあげている。

始祖としてはほかに狼、虎がいる。

(25) ルネ・ネリは「熊と野生の女」『フォークロア誌』(一九四三)で、「この話の熊は人間の脱落者として描かれる。人間はそこに抑圧された暴力欲求や野性への誘惑を投入する。彼によって人間は動物性から解放されるのだ。しかし熊のほうではその逆に、女との愛を通して昔の人間性を回復しようとする」と言う。ピレネーの物語では「熊にさらわれた女」のタイプでも、熊には人間性が濃厚に認められる。

(26) 「美女と野獣」の「野獣」は何に似ているかと言えはやはり、一番似ているのは熊である。スワンの四二五番話型研究(一九五五)によるとスウェーデンでは十三話が熊である。ただしギリシヤでは熊はゼロで、鶯が四例ある。魚や龍もある。これをフランスでは多く「怪物(けもの)」と言う。トルコは猿が多い。(九例)次が馬で九例(ロバが三)、鳩が八(鳥が五)。

(27) 千葉徳爾も「日本民族の熊狩儀礼」で、各地の熊に関する儀礼を紹介しているが、大分の庄内町の熊群神社の縁起譚で、「岩上の熊を狩ようとする」と弥陀三尊となり、さらに三つの鏡となった。これを熊野の三所権現とまつり、変遷を経て今に至った(三六七頁)と言う他は儀礼はともかく信仰の痕跡はない。(「狩猟伝承研究」一九六九)しかし、日本神道の形成される前の信仰として熊のそれがあつた可能性



は否定はできない。ただ、そのばあい日本にどれだけ狩猟文化があったかが問題になろう。なお今道友信は「熊神が最も栄えた地域のひとつと見られる日本」(『日本の幻想』、『日本の美学』十七号)と言うが、「神武東征の頃に、すでに残党でしかなかったという熊族」とも言う。

一方、近代のものになると、「熊野様を祀っている人が熊とり仲間に入ると、熊はとれない」(佐久間淳一『狩猟の民俗』一九八五、十八頁)といったように、熊と熊野をかけたジンクスめいたものが中心で、熊野信仰が熊狩りの風俗に影響を与えていても、本来の「熊野信仰」とは関わりがないものだろう。ただ、山岳狩猟風俗として当然、修験者との関わりがあり、熊野修験が熊狩り儀礼に関与することが重なるうちに、熊を熊野の使役獣のように見る傾向が出なかつたとは言いきれない。

(28) シャーマンはさまざまな霊を呼びだす存在で、ここでは、熊が呼びだされることもありえようし、彼らの生活では狩猟儀礼が重要で、ここでは狩猟動物としての熊が「祭られる」ことが少なくない。したがって、シャーマンの祭儀の中にも熊が登場する比率は高いだろう。しかし、とくにシャーマニズムに「熊信仰」があるとは言えない。また、「熊祭り」で熊の毛皮を着て熊のまねをするものがシャーマンであるともかぎらない。

ワシリーエフはドルゴンとヤクトについて「それぞれのシャーマンは、魚、鳥、昆虫などといったようなさまざまな動物の姿をとって現われると想像される。数多くの補助霊をもっているが、その他に自分の生死がかかっているもう一つの主霊イエークル(母獣)をもっている」と説明する。

セロシエフスキーによれば、「牡牛、牡馬、熊、おおしか、鷲」がイエークルとしては強い。犬か狼だと弱い。(ハルヴァ、四二九頁による)

シャーマンになるには霊の導きが必要でスタインベルクの資料に

よればゴールド族のシャーマンにあられる霊は翼の生えた虎になって、シャーマンを空中に運び、世界の驚異を見せる。そして、シャーマンに雑用をさせる動物、豹、熊、虎を与える。ハルヴァによるとその使役霊は克蘭・トータムで、牡牛なら牡牛だ。本人はそれとは別に熊や、カワウソや、鮭になる。生きた馬になって乗用になる竹馬(杖)も使われる。熊だけ特別に出てくるわけではない。

それでも、とくに「熊」にかかわりがある風俗がある。すなわち、シャーマンは鉄で作った熊の手をはめる。「その手によってシャーマンは獣になる。プリアート族の昔話によると憑依に入ったシャーマンは夜間、熊になる」(コックススウェル『シベリア人他』三七一頁、ルによる)

一般にシベリアのシャーマニズムや信仰では、鷲、鳥、白鳥などの鳥類が重要である。またトナカイもシャーマンの魂の移動のさいの乗物になる。

(29) アイヌの「イヨマンテ」は、しかし、はたして熊を神としてあがめる信仰の儀礼なのだろうか？ これがただの狩猟儀礼ではないことは、多く「飼い熊」を「送る」儀礼であることからわかるが、また、「送られる」、あるいは殺される仔熊が神そのものでもないことも明白である。仔熊は「神」のところへ送られるのだが、その「神」ははたして「熊」だろうか？ 大塚和義は「熊神」と言うが、「イヨマンテ」『季刊民族学』十一号、一九八〇)、アイヌの信仰する「神」はより広大で、かつ観念的なものではないだろうか？

(29) グベルナチスは熊に太陽神の性格を見ているが、いままでに見てきた物語では、洞穴性、大地性の性格のほうが強い。その意味で「熊舞」譚からわが国の「蛇舞」譚への移行の可能性が考えられる。中間には「猿舞」が考えられる。グベルナチスに従って「熊」||「猿」と考える。一方、「龍退治」譚と「猿神退治」譚の同一性から「猿」||「龍」||「蛇」の入れ替えが可能になる。もうひとつ、「猿婿」と「蛇婿」は同話型である。つまり、西欧の「熊」が日本では「蛇」になる。

(30) 「多くの民族で獣界の女王が熊女だった、というにとどまらず、熊そのものが毛におおわれた性欲さかんな「女」とみなされた例がよくある。狩人たちが殺した熊と性行為に及んだり、その模倣をしたのも、まれではなかった」(デュル『再生の女神セドナ』(一九八四、九一頁)。

デュルは「獣界の女王」という概念を初期狩猟民に導入したが、「シャーマンを育成し、助霊を授け」云々という獣皮をまとった女とされているのは疑問だ。

(31) 日本の原神話に、中心から排除される反文化的要素として、スサノオとかホムチワケとかオウスノミコト、あるいはオオナムチの存在があげられ、大和朝廷によって平定された他文化圏の象徴として雷神系の蛇神を祀る、あるいは幽閉する三輪山のイメージが想起される。しかし、それらはいずれも支配者の物語である。敗者であっても、支配者に対立したものの、それも往々にして支配者の系統の脱落者である。それについて、本当の意味での非中心的庶民文化の神話はなかったのだろうか？ 落人伝説でも戦闘の記憶でもないもの、神社の縁起でもなければ、「ソバの根が赤いわけ」といった自然説明神話でもないもの、昔話でも伝説でもなく、そして中央権力とも関係のない「英雄」が「運命」と戦って、「人間」の尊厳をあかしたてた物語、あるいは「神」が天降って朝廷でも豪族の館でもない自然の山野で、美しい娘と崇高な恋をした物語、その神への愛に燃えつきた乙女の命が野に咲く花になり、空に輝く星になった物語が、どこかにないだろうか？ 悲しい恋に死んだ乙女が花になった話、鳥になった話はどこにでもあっても、その恋の相手として、人々は本当の意味での「神」を見ていただろうか？

そうやって各地の伝承を見たときに、日本でもっとも神話らしい神話として、「金太郎」の物語がかびあがってはこないだろうか？ 龍のたねを受けて熊の洞穴に生まれた熊の子太郎、短い生涯のあいだその怪力で人を驚嘆させ、中央の歴史にくみこまれることを拒否して山

に戻って姿を消した彼こそ、「かぐや姫」以上にまばゆい他界からの訪れ人ではなかったろうか？ 龍神の子としては、道場法師もいるだろう。大いなる蛇神が地上にそのたねを残そうとする試みは、みめ美わしい乙女を選んではいくと繰り返されたろうか？ しかし、人はその都度、針と糸で「神」を封じこめようと、菊酒や菖蒲湯で、神のたねを墮ろそうとしてきた。龍神の子が山の頂上で山姫の無私、無欲な夢の中に入りこみ、山の神としての熊男に育っていった物語、そこには、さいわいにして「鬼子」として押し殺されもせず、鬼として退治されることも免れた稀な神の子の物語が読みとれよう。